
祝辞

春夏冬 直樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祝辞

【コード】

N3400Q

【作者名】

春夏冬 直樹

【あらすじ】

亡き母が娘に送った手紙。

それは祝辞だった。

「光あれ」

始まりは神様のこの一言で始まった。この世界は光に包まれ生まれてきた。

目覚めの朝はそれに似たものがある。目を覚ますとあたりは真っ白な光に包まれていて、

私の心に天使の羽の感触があった。そんな、神々の世界を漂っていた私が時間を確認するために携帯電話を手に取った。予定していた時間からすでに20分過ぎた時刻を携帯電話の四角い画面が笑うように示していた。慌ててベッドから飛び起きた私はすぐさまベッド脇のスリッパに足を突っ込み部屋を後にした。

くしゃくしゃな髪の毛を手ですきなながら今の扉を開けた。すでにこの家の主である父が大好きなお茶をすすりながら新聞を飲んでいました。

「おとうさん、どうして起こしてくれなかったの」

「ん、弥生か。もうそんな時間か」

マイペースな父が私のほうを振り向いてつぶやいた。

ダイニングを見渡すとすでに父は朝食をすでに済ませたあとで、私の分の朝食だけがテーブルの上に置かれていた。それはいつもの光景だった。私がまだ小さかったころから父は朝早く起きて私のお弁当や朝食を作ってくれた。父と娘の二人だけの家族の生活がそこあった。

今日は佐々木家にとって一大イベントが行われる特別な日だ。

私の結婚式。

そんな大事な日の朝なものになぜかバタバタとしている。それは期待とか不安とか心に募るもののために昨夜、寝つけられなかったせいもあるかもしれない。けれどそんなことをあれこれと詮索する時

間はもうなかった。式場へ向かう時間は刻一刻と近づいている。

私はまだ着替えの済んでいない父に準備をするように早口でまくし立てた。父はゆっくりと立ち上がると自分の部屋へ着替えをするために消えていった。

私はすばやく朝食を食べ終わるとジーンズにチエックの柄の長袖のシャツを羽織って身支度を調えた。どうせ式場に行けばドレスに着替えるから、できるだけラフな格好を選んだ。

式場に到着するとすでに未来の夫になる佐々木雄太が首を長くして入り口に立っていた。私はほんの短い言葉を彼と交わしただけで少し小太りの着付けのおばさんに腕をつかまれて控え室へと連行されていった。控え室にはメイクを担当する人が腕を組んで私の到着を今か今かと待ちくたびれた様子だった。私はマネキン人形のごとく椅子に座らされ夢の花嫁へと変身していった。

彼と再会したのは着付けも終わり、化粧も終わった後だった。控え室に来た彼は私を見るなりひとこと「綺麗だよ」といつてくれた。それとくらべて父は部屋に入ってきて私を見てひとこと「うん」と呟くように頷いただけだった。

式が始まるのを緊張の面持ちでいる彼とは私の勤めている会社の社員旅行先で知り合った。宿泊先のホテルに偶然にも社員旅行できていた取引先の営業マンだった。最初は物静かな感じでちょっと暗い人だな〜と感じたが、実際話してみるとやさしさの中に何か力強さがあることに気が付いた。少し痩せ型なところがお父さんに似ている。

住んでいるところが意外と近いこともあって程なく交際が始まった。交際といっても最初は食事をするだけだったり、美術館に行ったり、まるで高校生のようなデートが3年ほど続いたある日、彼から大切な話があるから会って欲しいと連絡があった。私はいつものレストランで待ち合わせをした。

いつも待ち合わせをするときには早めに来ている彼が予定の時間よりも5分ほど遅れて来た。いつもよりも緊張したその顔はどこと

なくこれから大事なことを話そうとしているのかなという予感を抱いた。

「ぼ、僕と一緒に未来を作ってくれませんか？」

それは彼が必死に考えたプロポーズの言葉だった。

それからの私はとても忙しい時間を過ごすこととなった。

最初の関門は私の父への報告であった。物静かで優しい父だが果たして彼を認めてくれるのだろうか。先に結婚した友達の話から何かしらの騒動が起こるのではないのだろうかと心配していたが、その居に反して父は静かに彼の言葉を聴いていた。

しばらく間が空いたあと父は姿勢をただして彼に言った。

「どうか娘をよろしくお願いします」

それからは彼の両親への挨拶に始まり、結婚式の準備などやらなければならぬことが山ほどあることに気づかされた。その一つ一つが彼とのはじめでの共同作業のように感じた。そして、これから来る未来への幸せの予感を抱いたりもした。

式は私のたつての希望により、教会で行うことにした。この式場を選んだ理由も教会が披露宴会場と同じ敷地にあったからだ。

なぜ教会でなければいけなかったのか。

それは子供のころからの憧れだったからだ。

私には母がいなかった。母は私を産んですぐに亡くなってしまった。そんな母がお気に入りだった写真が教会でウエディングドレスを着て写されたものだった。とつても幸せそうな母の顔が一度も逢ったことのない子供の私にとって唯一の宝物であった。

控え室に係員が結婚式の始まりを告げに来た。彼と私の父、彼のご両親や兄弟たちが係員に案内されて一足先に教会に向かった。私は少し間を置いて係員に連れられて教会に向かった。

私は教会の扉の前で立ち止まった。控え室を出るときに慌ててブーケを忘れそうになったりもしたが、緊張する心が先走りそんな失敗もすぐに気にならなくなっていた。扉からもれていたざわめきが突然静寂に変わった。次の瞬間、結婚行進曲が厳かにながれだす。

静かに教会の扉が開いた。

目の前にはバージョンロードが広がり、傍らには父の姿があった。私は父に手をとってもらい静々と祭壇の前に進んだ。私の視線の先には神父さんと一緒に私を待っている彼の姿が見えていた。父は私を彼の前まで連れて行くと彼に私の手を差し出した。彼は私の手をとるとにつこりと微笑み、二人一緒に神父さんに向かいあった。

式は厳かに始まった。神父さんの言葉に対し二人で誓いの言葉を言った。そしてエンゲージリングの交換を終え、神父さんから夫婦の宣言をされて式は無事に終わった。

式が終わり、教会のドアが開かれると外には友人たちが私たちの結婚を祝福してくれるために集まっていた。ライスシャワーの降り注ぐ中、私と彼は階段を一步一步下りていった。

階段を降りきったところで私は後ろ向きになり、手に持っていたブーケをみんなのほうへと投げ込んだ。外国のテレビなどでおなじみの光景だが、待ち受けている女性達のほとんどが既婚者であったにもかかわらず、なぜかみんな我先にブーケを取ろうと手を伸ばしていた。

私の投げはなったブーケの行方は子供のころからながよくて、一番早く結婚した早苗の娘さん、遙ちゃんの手の中に納まった。まだ5歳というのにその満面の笑みをこぼす春香ちゃんを見てなんだか急に胸が熱くなった気がした。

披露宴が始まるまで私は控え室で休むことにした。

ふと見回すと父の姿が見えない。さっきまで居た彼もどこかに行ってしまった。もうすぐ披露宴が始まる時間だというのにどこに行ってしまったのかとやきもきしていると父があわただしく控え室に戻ってきた。

「お父さん、どこに行ってたの？もうすぐ、披露宴が始まっちゃうよ」

すると、いつもは物静かな父がとても緊張した面持ちで私に答えた。

「いやすまなかつたね。ちょっと緊張してしまつて。ちょっとトイレに行つていた」

すこし痩せ型でとことなく頼りないような父だが、男手ひとつでここまで私を育ててくれたことにとても感謝している。不器用な父は最初のころは慣れない家事や育児を寝る間も惜しんでがんばつてくれたと、親戚のおばさんから聞かされたことがある。私の母は料理、洗濯、掃除なんでもこなす良妻賢母だったらしい。その反対に父は何にも出来ないごく平均的な男性だったみたいだ。乳飲み子の私を不器用に背中に背負いながらよくおばさんのところに育児や料理を習いに来ていたと聞かされたのはごく最近になつてからのことだ。そんな父もいつしか髪の中に白いものがちらほらと目立ち始め目じりのしわも少しずつ増えてきた。そんな苦労したことを微塵も感じさせずにいつも笑顔を絶やさず、私を見守つていてくれた。

いよいよ、披露宴の始まる時間になつた。列席者を迎え入れた後、私と彼はドア前に残り、入場のときを待っていた。彼の顔には先ほどの式の緊張がまだ残つていようだった。視線をドアの一点に集中させて、何か呟いているようにも見えた。そんな彼が私の方に振り返り、「リラックスするんだよ」と言つたその顔はとでもリラックスを想像させるものではなかつた。少し、心の中に張つた緊張の糸が緩んだ気がした。その時自分もとても緊張していたことに気づかされた。ドアが係員によつて開かれた。スポットライトが私たちを導き、ウエディングマーチの祝福を浴びながら、会場へと入場した。

私の結婚は友達の中では遅いほうだったので、今までにいろいろな友人の結婚式によばれることが多かつた。傍目から見ていて花嫁や花婿の緊張する姿を面白おかしく笑つていたのだったが、実際に自分が主役となつてこの場に立つと、緊張のせいもあり空中に舞い上がりそんな感覚を抱いた。彼も同じらしい。いつもの優しい顔が目をまん丸にして緊張していた。まだリラックスはできていたみたいだ。

披露宴の司会は友人の誰かを考えていたのだが、誰もこの大役を引き受けてくれそうになかったので式場をお願いしてプロの司会者をお願いした。おかげでさすがプロだ、と思わせるように滞りなく披露宴は進んだ。

司会者が一通りの挨拶を済ませた後、仲人の挨拶が始まった。仲人は彼の叔父さんをお願いした。実はその叔父さんというのが彼の勤めている会社の社長なのだ。その叔父さんには子供がいなかったこともあり、次期社長は彼になるのではないかともつばらの噂だったが、彼はそんなこと気にも留めていないようだった。というのも彼には将来小さな喫茶店を開きたいという夢があると聞かされた事がある。私もその夢には賛成だった。今はまだ誰にもそのことを言ったことがないので、まわりのみんなからは玉の輿だと囃したてられても、そつと笑みをこぼすだけになっている。時期が来たらその時、みんなに知らせようと彼と話し合っていた。

仲人の挨拶というものは往々にして長引いてしまうのが世の常である。案の定、予定よりも大幅に時間を取ってしまった。仕方がないので私の友人がするスピーチが一つキャンセルされてしまった。

会場の脇から大きなウエディングケーキが運ばれてきた。いよいよ、ケーキ入刀である。彼と二人でする最初の共同作業といわれているが、今日のこの日までにすでにたくさん共同作業をして来た気がする。このケーキ入刀はあくまで披露宴に来た人たちへのパフォーマンスかもしれない気がした。その証拠に入刀と同時にまるでマネキンのごとく固まってみんなのフラッシュを浴びなければならなかったからだ。しかし、それもこれも幸せの形骸だとしたらそれはそれでうれしかったりもする。

私はこの後、お色直して席を立ち、改めて彼と二人で会場に入っただときには先ほどの硬い雰囲気もほぐれ、笑顔になっていた。この後続く、来賓の祝辞や祝電の披露、キャンドルサービスは予定どうりに進んでいた。

無事に最後のセレモニーを迎えることとなった。私たちはそれぞれ

れの両親に花束を手渡しして、彼が感謝の言葉を震える声で読み上げた。一生懸命の彼を見つめて、改めて喜びが込み上げてきた。あとは司会者が披露宴の閉会の挨拶をするだけになった。ところが突然、司会者の口からから予期せぬアナウンスが流れてきた。

「まことに僭越ではございますが、ここである方の祝辞を代読させていただきます」と思っています」

私はびっくりして、彼の顔を見た。彼には事情がわかっているらしく、私に向かって軽くうなずいてきた。周りを見回すと、彼の両親も父も同じようにうなずいていた。私以外はみんな知っていることらしい。

会場の脇から一人の女性が姿を現し、父に歩み寄ってきて父から一通の封筒らしきものを受け取っていた。彼女は静かにマイクの前に立ち、ハサミで手紙の封を切り、中から手紙を取り出した。

「では、代読させていただきます」

理由はわからないがなぜか司会者ではなくその女性が読むようである。

『弥生、御結婚、おめでとございます。』

今日という晴れの良き日に私がこの場に出席できない御無礼をお許しください。

あなたが私の体の中に宿ったことをはじめて知ったお父さんがとても大喜びしたことが昨日の事のように感じられます。

二人でああなたの誕生を心待ちにしていたある日、私はとても重い病気にかかっていることがわかりました。お医者さんからはどちらかをあきらめなければならぬという事を告げられました。自分の命かあなたの命か、私はとても悩みました。そしてお父さんと何度も相談をした結果、私はあなたを選ぶことにしました。

あなたは私が8年もの間、待ち望んでいた大切な宝です。あなたをこの世に誕生させる事が私がこの世に生まれてきた使命だと私は

考えています。お父さんもそれに賛成してくれました。ただ、残るお父さんには多大な苦勞を掛けてしまうことが心苦しいことと思っ
ています。それ以上にあなたに何も残せないことが心残りです。た
ません。

そんなある日、私はあなた宛の手紙を書こうと思いましたが、
いつごろのあなたに手紙を書こうか悩みましたが、やはりあなたの
人生の中で一番光り輝く時に送ろうと考え、結婚式に送る祝辞を書
くことにしました。これからはあなたの選んだ伴侶と末永く幸せな
生活を私の分も合わせて送って欲しいと思います。花婿さんにはご
挨拶が出来ない御無礼をぜひお許し願いたいと思います。どうぞ、
弥生をよろしく願います。

最後に自分ごとではありませんが一言付け加えさせていた
と思います。お父さん、長い間苦勞をかけてすいませんでした。

今でもあなたのことを愛しています。

1976年3月2日 母 洋子より

□

私は母からの思いがけない祝辞を聞いて、その場に泣き崩れてし
まった。彼が優しく肩に手を添えて私を支えてくれた。彼の差し出
してくれたハンカチを手にとって目をぬぐうと目の前に父の顔が見
えた。いつももの静かでした。しかし、気丈で人前では泣いたことなかつ
た父が人目をはばからず泣き姿が見えた。それは私が始めて
みる父の涙だった。会場からも啜り泣きをする人が何人かいた。

披露宴が終わり会場から出て行く人たちに一人ずつ挨拶をしてい
るとき、どこからか声が聞こえた気がした。それは神様が私たちに
祝福の言葉をささやいたのかもしれない。それとも天国にいる母が
天使のように微笑んだ顔で私たちを祝福してくれたのかもしれない。
その声は高らかに、そしてやわらかく言った。

「幸あれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400q/>

祝辞

2011年1月22日23時26分発行